

NIH での研究留学

National Heart, Lung, and Blood Institute (NHLBI)
National Institutes of Health (NIH)

原矢 佑樹

(国立医薬品食品衛生研究所)

NIH での研究留学を 2020 年 10 月より開始し、約 8 か月が経ちました。27 つの研究所で組織される NIH は、生物医療や衛生の分野において、世界に影響を与える成果を輩出し続けている一流の国立研究機関であり、その一角である NHLBI は、心臓・肺・血液に関連する研究を主に行なっています。新型コロナウイルスの世界的流行の渦中にありますが、幸運にも私は、NHLBI 内の脂質代謝研究室で活動できており、新しい知識や技術の習得に励んでいるところです。一方で、当該研究室が成功している仕組みにも目を向けながら研究活動を送っています。ここでは後者の点について、気づいたことや感想を書かせていただきます。

留学初日の雑談時、研究室を主宰している Alan Remaley 博士に「組織を成功させる秘訣は何だと思いますか？」と質問をしたところ、「I think it's about making people happy. I want to make people happier.」と話してくれました。実際に、毎週の定期ミーティングでは、各員の進捗報告についての議論に加え、関連論文の紹介や研究費獲得のための新規提案を思いついた人はプレゼンを行なって全員からフィードバックをもらうなど、研究室が一丸となって個人の成功を支援する組織文化が確立されており、ヒトの動機が健全に維持されています。また、年齢や役職に関係なく個人を尊敬し合う脂質代謝研究室の精神と意見を主張しやすい英語の特性も要因になっているのか、Remaley 博士も含めて全員がファーストネームで呼び合ったり、気兼ねなく話し合ったりするといったように風通しの良い職場であるため、より良い考えや行動が自然と共有されています。他の特徴として、「経験がある人に相談しよう、頼られたら協力しよう」という心持ちが Remaley 博士を筆頭に研究室のメンバー全員に根付いており、これまでの活動によって、研究室の内外を問わずオープンイノベーションの精神をもつ人達のみで積極的に共同研究を推進できるネットワークが形成されています。このような全員がそれぞれの成功を追求しながら伸び伸びと研究活動を送れる環境が、脂質代謝研究室が卓越した成果を継続して出している大きな要因になっていると感じています。

帰国後に日本での活動を再開するにあたっては、留学で習得した実用的な研究の知識および技術を活用する事はもちろん、異なる専門性をもつ研究者の方々との相互連携を行う事によって、これまで以上に豊かな研究人生を送れるよう努めていきます。また、ものごとを敢えて英語で考えたり、留学経験を追憶したりする機会を適時作りながら、留学先で垣間見

えた成功のヒントを活用していきたいと思います。

最後に、海外留学をご支援くださった上原記念生命科学財団の皆様、厚生労働省および国立医薬品食品衛生研究所の皆様、メンターである京都薬科大学薬品物理化学分野の斎藤博幸教授、ならびに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

COVID-19流行下での米国留学

National Heart Lung and Blood Institute (NHLBI)
National Institutes of Health (NIH)

平 賢一郎

(国立精神・神経医療研究センター)

2020年7月より、米国メリーランド州にある NIH (National Institutes of Health) に visiting fellow で留学しています。ご存知の通り、COVID-19 流行のため、渡米できるかわからない状況でした。しかし、研究室の PI である水野直子先生のご支援により、無事に家族(妻と子供3人)揃って一緒に渡米することができました。COVID-19 流行のため、様々な事がイレギュラーで大変苦労しましたので、ここで記したいと思います。

まず、渡米のタイミングを延期せざるを得なくなりました。当初は4月の渡米予定でした。3月頃から、米国にも感染が広がり、NIH もクローズになりました。PI の水野先生のご指示のもと、日本で待機することになりました。3月末で前職を退職していましたので、アルバイトで生活費を調整する必要がありました。しかし、COVID-19 流行のため、外来や検診はクローズしアルバイトのコマ数が減り、経済的に厳しい状況が続きました。最終的に、6月頃から NIH が受け入れを再開し、7月に渡米することにしました。水野先生のご支援がなければ渡米できなかったかもしれません。大変感謝申し上げます。

7月の時点でワシントン・ダレス国際空港の直行便がありませんでした。結局、シカゴでトランジットし、ロナルド・レーガン・ワシントン・ナショナル空港へ到着しました。シカゴまでの国際線内は意外と乗客がいましたが、乗り継ぎの国内線は私たち家族だけでした。空港着は夜9時で、空港内もほとんど客もおらず閑散としていました。しかし、車を買う予定の Japan Auto Services のスタッフさんたちが送迎に来てくれ大変助かりました。トランク9個もあったので、あの時の送迎がないとホテルへ到着は不可能だったと思います。大変感謝申し上げます。

一番の苦労は、米国での事務手続きが極めて遅延していたことです。米国では SSN (Social Security number) を取得する必要があるのですが、COVID-19 流行のために事務所がクローズで、電話での予約制でした。英語の不慣れな私にとって、電話で英語のやりとりするのが本当に苦痛でした。さらにアポイントのコールバックに1ヶ月程度待ちました。NIH の ID や運転免許など様々な手続きに SSN が必要で、非常に不便でした。

今でも研究はシフト制です。週10コマ(平日5日で午前と午後)のうち7コマ程度の出勤と制限されていました。ミーティングも zoom を用いたネット会議でした。しかし、このスタイルがニューノーマルとして今では慣れました。制限時間内に研究を完遂することに

努め、無事に帰国することを目指しています。以上の通り、様々なトラブルを記しましたが、今では比較的快適に生活および研究をしています。

最後になりましたが、このような貴重な留学の機会を与えて下さいました上原記念生命科学財団の皆様、国立精神・神経医療研究センターおよび東京大学医学部附属病院脳神経内科医局員の先生方、NIH 金曜日会の先生方、そして頑張っについて来てくれた家族に深く御礼申し上げます。